



小中一貫教育だより
 学校教育課・教育センター版
 令和2年7月31日 No.19
 (小中一貫教育推進だよりから 通算No.90)
 十日町市教育委員会学校教育課



吉田小 子どもがつくる「吉田っ子リレーカーニバル」から ※P 8で説明

氷山の一角

学校教育課長 山本 平生

中学生の頃、夏休みの自由研究テーマは「海の水はなぜ凍らないのか」「氷はなぜ水に浮くのか」と、決まって「氷」を素材に選びました。研究動機は「暑いから」以外の何物でもありません。塩水を冷凍庫に入れて観察する、ガラス管に水を閉じ込め冷凍庫に入れて観察するといったお粗末な研究です。動機が動機故、冷気を求めて冷蔵庫の前に鎮座しているだけというのも致し方ありません。

氷はなぜ水に浮くのか。一言で言えば「氷の状態の方が水の状態よりも密度が小さいから」ということになります。彼の中学生の研究によれば、水に対して氷の比重は 0.9 位であつたらしいです。水に浮かんだ氷は総体の 1 割程度を水面に出し、残り 9 割は水中に沈んでいるということでしょうか。

「氷山の一角」という慣用句があります。「表面に現れている事柄は、全体のほんの一部でしかない」ということの例えです。学力について話をするときにも「本当の学力はテストでは分からないよ。テストで測れる学力は、氷山の一角でしかないからな。」といった具合です。

それでも、テストの点数が学力の一つの目安になることも事実です。児童生徒のテストの点数を上げたいと願い、様々な学力テストで平均点を全国や県と比較するのがいい例です。しかし、テストの点数を上げるためには、実は、目に見えにくい学力(=水面下に隠れている氷)を今よりも大きく太らせることが大切です。テストの点数(=氷山の一角)だけを大きくしようとしても、氷山はどんどん沈んでしまいます。

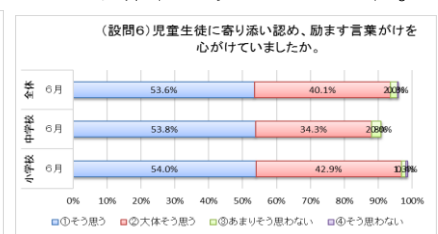
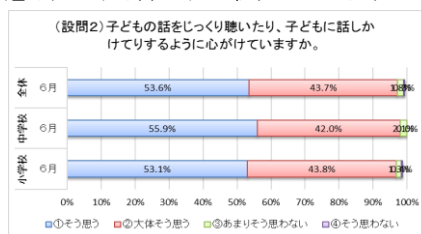
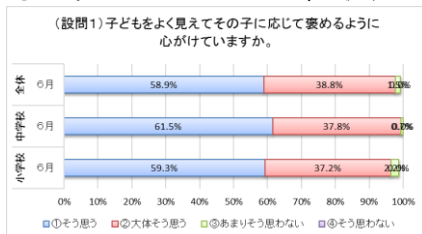
小中一貫教育より

■ 子どもたちの自己有用感を高めるための教職員意識調査の結果 教職員の高い意識を どう具体化するかが課題

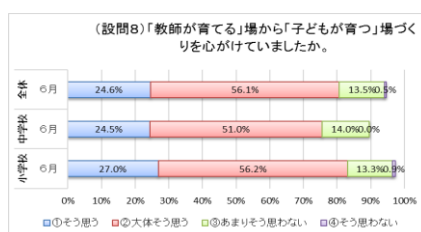
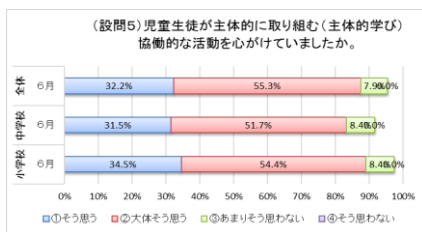
6月に実施した「自己有用感に関する教職員意識調査」へのご協力ありがとうございました。結果は、各質問項目とも肯定的評価が80%以上と高く、12項目中7項目で90%以上という結果でした。また、小中学校間での特徴的な差は見られませんでした。

以下に、特徴として見られたことを紹介します。（調査は、昨年度までの意識）

質問項目1「子どもをよく見てその子に応じて褒めるように心がけていますか」、項目2「子どもの話をじっくり聴いたり、子どもに話しかけたりするように心がけていますか」、項目6「児童生徒に寄り添い認め、励ます言葉がけを心がけていましたか」については、強い肯定的評価が50%を超え、教職員の意識の高さがうかがえます。このことは、教職員として児童生徒に関わる上で、自己有用感を育むことに関わらず生徒指導上の配慮事項としても大切なことであり、取組を意識し具体的にに関わりやすいことが要因と考えられます。

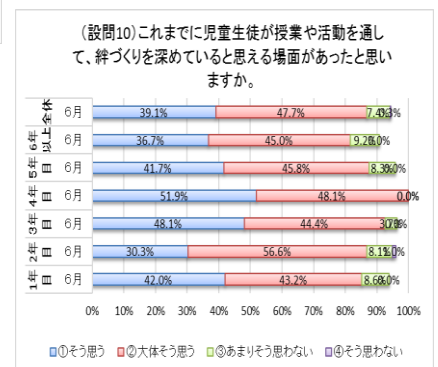


反面、項目5「児童生徒が主体的に取り組む(主体的な学び)協働的な活動を心がけていましたか」、項目8「『教師が育てる』場から『子どもが育つ』場づくりを心がけていましたか」について、強い肯定が20~30%台と他に比べ低い傾向があります。このことは、新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」に関連することから、単に児童生徒一人一人と関わるだけでなく、具体的な計画と継続的な取組が



必要です。そのため、今後授業改善や活動計画の検討を含めより具体的・計画的な取組が望まれます。

また、十日町市立学校のH26年度以降の勤務年数別で見た場合(右の設問10は一例)、4年目の教職員の強い肯定的評価が12項目中8項目で最も高く、次いで3年目の方が高い傾向が見られました。理由として当市の小中一貫教育の取組を理解した後、意欲的に取り組んでいる結果とも思われます。反面、勤務年数が5年より長くなると肯定的評価が低くなる傾向が見られます。長年の取組により、自己有用感を高める取組の難しさを感じているものとも思われます。



以上のようなことから、当市の教職員は児童生徒の自己有用感を高める意識は高いと言えます。このことは、当市が小中一貫教育を進める上で「自己有用感」を共通取組事項としたことの成果であると考えます。今後は、思いや意識をどう具体化し実践するか、取組の質をどう高めるかが課題です。夏季休業中の中学校区毎の研修会が一つのきっかけとなり、2学期以降の取組につながることを期待します。

教育相談班より

『十日町市学校教育のめあて』に位置付いている「不登校・いじめの減少」「特別支援教育の充実」に向け、6月には「第1回不登校対策研修会」「第1回いじめ防止対策校長研修会」「第2回特別支援教育研修講座」の3つの研修会を開催しました。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、密集・密接・密閉の3密回避に配慮しながら、従来2時間で実施してきた研修を30分短縮する形で行いました。

それぞれの研修会について、参加者の感想・意見を含め紹介します。

■ 第1回不登校対策研修会 報告

日時：6月11日（木） 14:30～16:00 会場：千手コミュニティーセンター「千年の森ホール」
講師：中越教育事務所 指導主事 佐藤 典人 様 参加：28名 ※生徒指導・生活指導担当者が中心

「不登校」について、不登校とは？自己有用感って？生徒指導の3機能？自己指導能力？等々の用語の基礎・基本から対応のあり方までを演習を通して、具体的に学ぶことができた研修会となりました。参加者からは、「とても有意義な研修だった。」「基本的な用語の意味理解から取組まで、学校全体で共通理解していく必要があると改めて考えさせられた。」「学校生活のいろいろな場で生徒指導の3機能を取り入れていけるよう職員研修で足並みを揃えたい。」「改めて新しいことをするのではなく、今やっていることを組織として、意図的・計画的に進めていけるよう今回の研修内容を校内で共有したい。」「郡市教振で一斉研修等は計画できないものだろうか。」といった感想が寄せられました。

しかし、「新型コロナの影響で厳しいかもしれないが、もっと早い時期にすべきだ。」「もう昔には戻れないから今をどうするかが大切ではないか。」といった意見もあり、不登校対策研修の時期は今後検討していきます。

今年度2回目の研修会は、10月7日（水）に教頭先生を対象に、引き続き講師を佐藤典人指導主事をお願いし、開催する予定です。

■ 第2回特別支援教育研修講座 報告

日時：6月12日（金） 14:30～16:00 会場：千手コミュニティーセンター「千年の森ホール」
講師：ふれあいの丘支援学校 校長 小網 輝夫 様 参加：28名 ※特別支援教育コーディネーター対象

市の特別支援教育研修講座の講師を何度も務め、市の特別支援教育をリードしてくださっているふれあいの丘支援学校 小網校長を講師にお招きし、演題「特別でない特別支援教育の具現 ～特別支援教育コーディネーターの役割～」と題し、具体的なご教示をたくさんいただくことができました。

参加者からは、「大変分かりやすく普段の実践に生かせる内容だった。」「担任や保護者への対応例がとても具体的で分かりやすく、とても参考になった。」「まずは9割の子どもが参加できる授業づくりを心がけ、大事にしていきたい。」「三段階の特別支援教育について、校内で共有したい。」「保護者へ伝えづらいなあと思うこと

が多いが、一次、二次の対応をしっかりと把握し、共有することが大切だと分かった。」等、特別支援教育コーディネーターとして明日からどう校内の動きに反映させるか、意欲に満ちた感想が寄せられました。「もっと早い時期に話を聞きたかった。」「毎年、聞きたい内容、みんなで共有すべき内容だと思った。」という声もあり、有意義な研修だったことがうかがえました。

■ いじめ防止対策校長研修会 報告

日時：6月25日（木） 14:30～16:00 会場：千手コミュニティーセンター「千年の森ホール」
 講師：県教育庁生徒指導課 副参事・指導主事 久保 俊幸 様 参加：29名 ※校長対象

県教育庁生徒指導課 久保俊幸副参事・指導主事からお越しいただき、校長対象の標記研修会を開催しました。いじめ問題は「どこでも起こりうる」ものであり、その未然防止及び早期解決は、喫緊の課題であることから、組織総ぐるみで対応することが求められています。久保指導主事から、「いじめ問題」に関わる基本的事項から組織体制づくり、そして、「自殺予防」のあり方、「県の取組」についてご指導いただくことができました。参加した校長からは、「話、事例が分かりやすく、学校に帰って学んだことを活用したい。」「多くの先生方には是非聞かせたい内容で、必ず校内研修を行う。」「最善のつもりでしてきたことが、本日の研修を受けさらなる課題が焦点化された。」「改めて自校のいじめ防止、自殺予防の体制の確認、徹底を行いたいと強く思った。」「県内の状況、事例を踏まえ、校長としてしっかり理解しなければならないことをポイントを押さえ、分かりやすく説明いただけた。実践にいかしたい。」等の感想があり、有意義な研修になったことがうかがえました。ただ、時期をもっと早く開催すべきというご意見もあり、次年度の課題となりました。

■ 8月の「特別支援教育」研修事業のお知らせ

7月10日（金）「段十ろう」で開催を予定していた「第3回特別支援教育研修講座」は、新型コロナウイルス感染防止対策の影響で会場を確保できず行いませんでした。

そのため、8月19日（水）に開催する特別支援教育研修公開講座に含む形で開催します。

急な変更となりましたこと、お詫びします。

申込〆切は、8月7日（金）までですので宜しくお願いします。

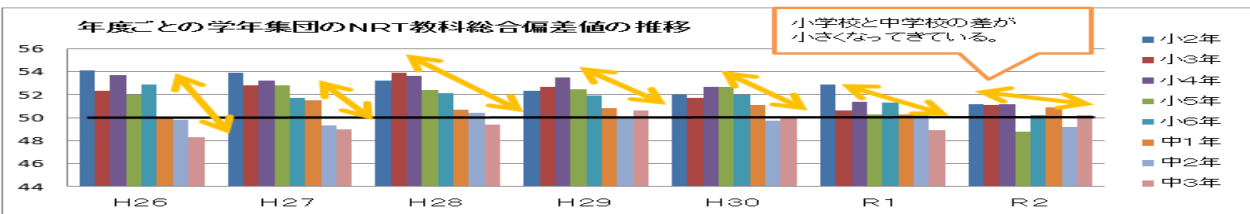
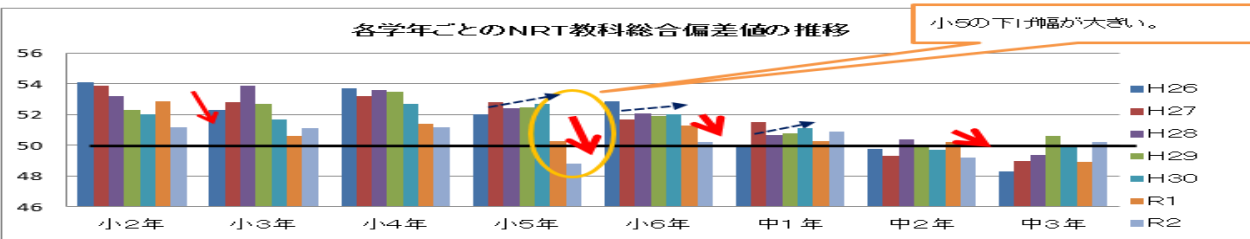
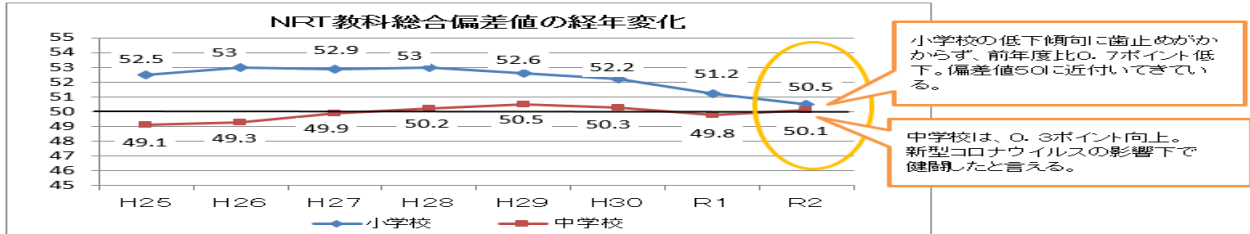


事業名	期日・時間	内容及び会場
特別支援教育研修講座 ③	8月19日（水）	講師：加藤 哲文様（上越教育大学教授）
特別支援教育研修公開講座	14:30～16:30	会場：千手コミュニティーセンター 「千年の森ホール」

学習指導班より

NRT標準学力検査の結果から

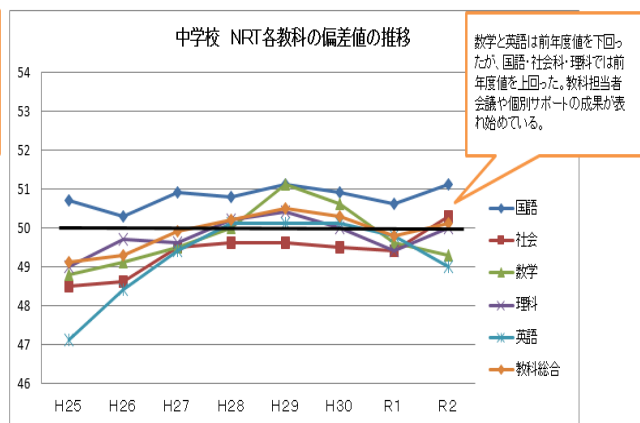
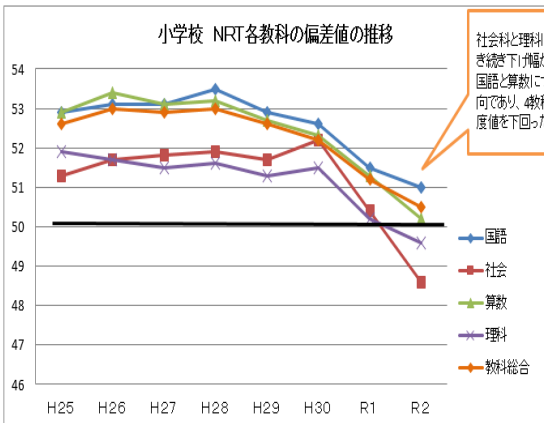
新型コロナウイルスの影響により、当初の計画から時期を遅らせて実施したNRT標準学力検査の結果が届きました。詳細な分析結果は、校長会・教頭会・学力向上推進会議で改めて提示しますが、市全体の結果を速報としてお伝えします。



- 小学校は、教科総合偏差値 50.5、前年度値より 0.7 ポイント低下し、ついに 51 台を下回りました。3・4 学年（2・3 学年の学習内容）では若干の改善傾向が見られるものの、5 学年（4 学年の学習内容）で大きく低下しました。
- 中学校は、教科総合偏差値 50.1 となり、前年度値より 0.3 ポイント向上し、50 台に回復しました。1・3 学年で改善傾向にあるものの、2 学年（1 学年の学習内容）では落ち込みが大きい状況です。

★ 小学校 4 学年と中学 1 学年の学習内容の定着が課題となっています。奇しくも、両学年とも WEBQU の実施対象学年です。授業改善の視点での分析ももちろん必要であり大切ですが、学級集団や児童生徒個々の学校生活における満足度の視点からも、学習に対する影響を考察してみる必要があります。

【各教科の傾向】



- 小学校では、社会科と理科で初めて偏差値 50 を下回りました。特に社会科は、2 年連続で 1.8 ポイント（2 年間で 3.6 ポイント）低下しました。算数も前年度より 1.1 ポイント低下しており、50 を下回っている理科と併せた 3 教科での対策が必要です。
- 中学校では前年度、国語以外の 4 教科で偏差値 50 を下回ったのが、今年度は国語・社会科・理科の 3 教科で 50 台に回復しました。



- ★ 中学校では、充実を図ってきた「教科担当者会議」の成果が表れていると言えます。
- ★ 小学校社会科と理科は、担任以外の教員が授業を担当している場合もあり、校務分掌上の主任だけでなく授業担当者が危機意識をもって授業改善や学力向上に取り組んでいく必要があります。また、それ以外の教科においても、担任や授業担当者といった個別の取組ではなく、学校全体で日々授業改善や学力向上に取り組む意識が必要です。
- ★ 「アシストシート」にしっかりと取り組ませた学校とそうでない学校で、差があるようです。今回は新型コロナウイルスの影響もあり、アシストシートを含めた事前指導が十分できなかったという学校もあることと思います。今後、再度の休校等に備える意味でも、時間のある時にアシストシートを印刷しておき、配付できるようにしておくとうよいと思います。

【アンダー・アチーバー（UA）について】

【市内小学校】

※BA=ボーダー・アチーバー（能力並み）、OA=オーバー・アチーバー（能力以上の成績）

	平成 28 年度			平成 29 年度			平成 30 年度			令和元年度			令和 2 年度		
	UA	BA	OA	UA	BA	OA	UA	BA	OA	UA	BA	OA	UA	BA	OA
2年	11%	65%	24%	13%	65%	22%	17%	64%	19%	13%	62%	25%	17%	72%	11%
3年	11%	72%	17%	11%	69%	19%	12%	73%	15%	19%	67%	13%	17%	68%	14%
4年	9%	73%	18%	11%	70%	19%	9%	71%	20%	9%	75%	17%	11%	76%	13%
5年	11%	78%	11%	11%	79%	10%	9%	79%	12%	19%	71%	9%	16%	77%	7%
6年	14%	76%	10%	8%	77%	15%	6%	80%	14%	9%	78%	13%	19%	70%	11%
市全	11%	73%	16%	11%	72%	17%	11%	73%	16%	14%	71%	15%	16%	73%	11%

【市内中学校】

	平成 28 年度			平成 29 年度			平成 30 年度			令和元年度			令和 2 年度		
	UA	BA	OA	UA	BA	OA	UA	BA	OA	UA	BA	OA	UA	BA	OA
1年	14%	78%	8%	9%	78%	14%	14%	74%	12%	17%	73%	9%	14%	77%	10%
2年	19%	74%	7%	19%	73%	8%	15%	75%	10%	19%	72%	9%	25%	68%	7%
3年	18%	71%	11%	20%	75%	5%	15%	76%	9%	14%	77%	9%	20%	69%	11%
市全	16%	75%	9%	14%	76%	10%	15%	74%	11%	17%	73%	9%	19%	71%	9%

※ 中学校は、知能検査との相関を出していない学校あり。

※ 例えば **赤枠** のように見た場合、平成 28 年度に 2 年生だった集団が、年度を追うごとにどのように変化してきているかを見ることができる。

○アンダー・アチーバー（UA）とは、知能検査などの水準から期待される能力より低い学力を示している状態のことです。能力を十分に発揮できていない状態とも言えます。この UA が増加傾向にあります。その年度の学年集団によって差異はあるはずですが、集団の 20% 以上が UA である場合は個別指導が必要であると言えます。

→ 各校の学年ごとに、UA の児童生徒に対して個別指導を充実させていく必要があります。

※ 小学 4 年と中学 1 年については、WEBQU の結果と照合していくことも有効です。

■ 学校訪問から

若手教員対象の個別サポート訪問、小学校外国語サポート訪問、要請訪問など、各種学校訪問がスタートして2か月が経とうとしています。

先日、ある小学校の算数の授業研究でのこと。6年生の「分数のわり算」の単元の終末、問題文から「何算かな？」と演算決定する場面でした。その学級では、問題を解いて答えが分かった子が発言した後、「どうですか？」と全体に聞く習慣があるようでした。よくある光景ですよ。すると大多数の子が「いいで一す！」と答えるのです。

ある女子児童（以後、Aさん）の姿が目にとまりました。Aさんは、ちょっぴり算数の学習が苦手なようでした。「何算かな？」の演算決定だけでなく、立式でどちらを被除数（わられる数）・除数（わる数）にしたらいいか、とても不安そうなのです。ある問題で被除数と除数を反対にしまっていたのですが、そのときです。「どうですか？」と聞く声。これに対し「いいで一す！」Aさんは、こっそりと自分が書いたものを消しゴムで消し、正しい式に書き直したのです。



$\times \div + - ?$

授業後、Aさんに声を掛けました。「私は実は、算数が苦手なんですけど、Aさんはどう？」Aさんは、はにかんだようにちょっぴり笑いながら「はい…。」「Aさんはきっと、分数のわり算で、計算ドリルのように『ひっくり返してかける』計算は自信があるんじゃない？でも、文章問題で式を考えると、どの数を前（被除数）にして、どれを後ろ（除数）にしたらいいか、迷うんじゃない？」「はい…。」「分かるよ、その気持ち。でも心配しないでいいですよ。きっと分かるようになるから。諦めないでがんばってね。」「はい。」

どのクラス、どの教科の授業でもよく見られるはずの子どもの姿だと思いませんか？

ジブリ映画「おもひでぼろぼろ」では、主人公タエコが小学校時代、分数のわり算の意味（1より小さい数で割るということ）がイメージできず、『ひっくり返してかける』ことに納得がいかない様子が描かれています。その結果タエコは、お姉さんから「何でもいからとにかく『ひっくり返してかけ』ればいいのよ！」と言われ、お母さんもお姉さんに陰で「あの子は普通じゃないの。」と話す始末。

先述の「どうですか？」「いいで一す！」のようなものを、『ヒドウン（隠れた）カリキュラム』と言います。教師の意識が及ばないところで子どもが傷付いたり困ったり、自己有用感・自己肯定感を喪失したりしていきます。もし、「どうですか？」と自分が聞いて、学級全体から「違いま一す！」と言われたら、立ち直れないですよ。

今回のAさんのような子が、「え？〇〇じゃないの？なんで？」と仲間に気兼ねなく聞くことができ、聞かれた側も「あのね、それはね…」と優しく答えられる関係、学級づくりを目指したいものです。また、仲間の意見に拍手を送って賛同したり、称賛したりできるのはとてもいいことですが、無条件、あるいは無思考的な「習慣のような拍手」はマイナスの効果である可能性さえあります。「相手の話をしっかりと聞いて自分の意見をもち、しっかりと相違点を主張したり、誤りを指摘したりでき、指摘された側もそれを真摯に受け止める」関係の方がレベルは上です。

できない・分からないという子が、そのことを表面に出せるとは限りません。一人一人の児童生徒の表情や記述を丁寧にみとり、適切な支援を心掛けていきましょう。

学校教育課・教育センター事業のお知らせ ～8・9月～

日 程	内 容【会場】	備 考
8月18日(火) 9:00～16:00	初任者ボランティア体験研修 【特別養護老人ホーム三好園】	対象：新採用教職員
8月19日(水) 9:00～12:00	イングリッシュキャンプ 【千手コミセン】	対象：小学校5・6年生
8月19日(水) 14:30～16:30	特別支援教育研修講座③ 兼 特別支援教育研修公開講座 【千手コミセン】	講師：上越教育大学 教授 加藤 哲文 様
8月20日(木) 13:30～16:40	英語・外国語活動授業力養成講座 【十日町情報館】	講師：新潟大学 教授 加藤 茂夫 様 対象：中学校英語担当 小学校外国語担当
9月	キッズ英語遊び塾 橘 小：4日(金) 15:10～16:00 鏡島小：10日(木)、25日(金) 14:50～15:40 馬場小：11日(金)、24日(木) 14:50～15:40 吉田小：18日(金) 15:10～16:00	
9月10日(木) 15:30～16:45	第2回学力向上推進会議 【千手コミセン】	対象：市内小中学校 研究主任

【表紙写真の説明】

新型コロナウイルス感染予防対策のため、小学校では一学期のメインとも言える運動会が延期となった学校が多くありました。そんな中、吉田小学校では6年生が中心になって「吉田っ子リレーカーニバル」を開催しました。その様子を吉田小学校学校だより「あすなる7月号」(7月10日)から紹介します。(一部省略等あり)

「こんな時だからこそ、吉田小ならではの学びがあるのではないか。」「6年生がリーダーとして活躍し、全校が協働して物事を成し遂げる時に得られる自己有用感を味わわせたい。」そんな吉田小の職員の思いがありました。

ゴールデンウィーク前、6年生に対して「いつもの年のような運動会ができません。でも、今年しかできない全校体育を6年生が企画してみませんか。」と提案しました。6年生は目を輝かせて「やりたいです。」と即答してくれました。子どもたちの思いと職員の思いが一致した瞬間でした。とても嬉しく、6年生と職員を誇りに思いました。

ゴールデンウィークが明け、いよいよ6年生が動き出しました。種目決めから、ルール説明の原稿や用具配置図など、通常の運動会なら職員が行っていたことを6年生が行いました。どうしたら、全校のみんなに楽しんでもらえるか？どうしたら、縦割り班の絆が深まるか？どうしたら3密を避けながら運動が楽しめるか？子どもたち同士で相談したり、先生方にアドバイスを求めたりしながら、合計6種目が企画されました。

「本当にできるかな。うまく説明できるかな。」との思いから、5・6年合同体育で試す子どもたち。「1年生もできるかな。」と、1年生に教えに行く子どもたち。どれも6年生が主体的に行動しました。競技は、3日間に分けて行われました。回を重ねるごとに説明が上手になる6年生。何も言わなくても道具の準備を手伝う5年生。高学年がいなくても、4年生がリーダーとなって整列して待つ吉田っ子。一人一人が自分の役割を感じ取って行動に移していました。子どもたちの手づくりによる、吉田小ならではの素敵な活動ができました。自慢の子どもたちです。

限られた条件の中で、6年生を中心に楽しく取り組んだ様子が伝わってきます。何より時間をかけ計画・準備し、当日を迎えた6年生の達成感と自己有用感が高まったことが想像できます。